

NPO Akaiyane 特定非営利活動法人 あかい屋根

NPOあかい屋根広報紙 発行：特定非営利活動法人 あかい屋根 ひまわり編集部 044-976-0444

ひまわり

第 525 号
2020/ 5 / 1

**閉館だからこそできるものを
4月7日～5月6日**

**蔵敷こども文化センター
図書室を幼児コーナー兼用に！**



**菅生こども文化センター
蔵書を入力し絵本図書館に！**



新型コロナウィルスの「非常事態宣言」によって、こども文化センターは「臨時休館」となっています。子どもたちがいないこども文化センターは、森閑としていて、どうしちゃったのだろうと思うほど異常な雰囲気漂っています。

いつ再開できるのだろうと後ろ向きに考えるより、この時期だからこそできることに取り組もうと、前向きな仕事をすることにしました。

●蔵敷こども文化センターでは
懸案だった、「幼児のコーナーをつくりたい」に取り組み始めました。図書室にその機能を合わせて持たせたいと考えていたのですが、子どもたちがいる中で、改装するのは危険が伴い、中々実行に移せないうままです。まず、幼児に危険と思われる暖房装置に覆いをこしらえることから始めることにして、写真のようなファンヒーターの覆いが出来上がりました。引き続き、DIYで



きることに奮闘中です。

●菅生こども文化センターでは
蔵書の図書台帳ができておらず、どんな本が何冊あるかわからないままでした。閉館になって図書の本の動きが無くなったのを幸いに、台帳作りに取りかかりました。入力し終わるのに1週間ほどかかりました。入力した本は約2700冊。入力していて、本が多すぎて引き出せないのに気が付きました。本棚は格納庫ではなく、手にしてもらおうための展示場でなければなりません。さらに、古くて破損した昭和50年頃のものも多く、誰も手に取らなくなっていました。建設当時、市に予算がなく本が買えないと知った住民が、バザーをして寄贈した本。大変な思いをして揃えたことを知っているだけに、忍びないのですが断捨離して、絵本に特化した絵本館に移行します。今では図書館事情も変わり、学校でも本が読めるようになった時代。センターでのニーズは、乳幼児のお母さんたちで、絵本が求められています。

図書室から Book

Guide


No.251

くろいの

田中清代/さく

備成社 1200円+税

ひびいて帰るいつもの道で、女の子が不思議な目さものをみつけます。全身まっくろで、大きな目を持っていて、動物でも人間でもないみたい。どうやら、自分にしか見えていないみたい。ある日、思いついて声をかけると、その『くろい』は、台の上からおろされて、どこそこ歩きました。思いきってついていくと・・・そこには素敵な出会いと、とても楽しい時間が待っていました。ひとりであるときの子どもの心に優しく寄り添ってくれるちょっと不思議でとても魅力的な生き物の、『くろい』。なんだか心がほっとするお話です。



なが い

つらい季節だけれど

編集後記 83

◆「新型コロナ緊急事態宣言」が発令されて、こども文化センターは5月6日まで「臨時休館」だ。子どもたちが、地域市民が来られなくなったセンターは、深閑としていて異常だ。子どもたちは、センターの前を自転車で通り過ぎながら中を伺う。「遊びたい」という気持ちは良くわかり、何とも切ない。みんな、この時期を何とか乗り越えるためには、やむを得ないことと納得せざるを得ない。

◆テレビでは「もっと早く『宣言』を出してもらいたかった」と様々な人が言う。だが、「宣言」には拘束力はなく、「自粛」を呼びかけるものでしかない。早く出していけば「企業」や「職場」が、働き方の工夫・対策をとり、働く者は早く休みやすくなっただろう。センターも「宣言」後、わくわくプラザを開室する職員と、センターの最低の保安要員だけを残り、他の職員は年間5日間取得義務となった有給休暇を取得させたり、自宅研修としたり職員同士の接触も極力抑えている。

◆自粛の真ただ中の4月19日、行楽日和となった日曜日。鎌倉には車の渋滞がおき、江の島の海岸ではサーフィンを楽しむ人たちがテレビで映し出された。他県に車でパチンコ店に行く人も。スーパーに家族連れで出かける人も、「早く宣言を」の言葉とは裏腹に、「宣言」が出て自己規制を守れない人もいる。さらに「自粛」と呼びかける、国会議員が

風俗店に行き、また警察署長の歓迎会が開催されクラスタ化させた報道を聞くと本当に虚しい。

◆高度に発達した「消費社会」では、観光、外食、趣味などのプチ贅沢が常態化し、生活に取り込まれ、それが「当たり前」となっている。戦後の物資不足を知っている世代の方は、当時の人は「食う」ことが第一優先だった。観光、外食、趣味などは夢の世界で、もし、夢が実現したときには「すごい贅沢」だと思った。デパートで食べた旗が立つお子様ランチ、お誕生日のケーキ、本を買ってもらえたこと、それが贅沢だった。そのような贅沢が常態化してしまっている現代、それを抑制することは難しい。また、抑制しなくてはと思うと、余計に「旅に出たい」「買い物に行きたい」「美味しいものを食べたい」と欲望が沸き上がってくる。

◆そんな時、子どもたちのことを考える。学校で授業を受けることができない子どもたち。友達とも会えない、遊ぶことができない子どもたち。この社会を正常化させるためには、今、ひとり一人が再自覚をし、極力自己抑制するしかない。将来、子どもたちが「あの時、みんなが頑張ってくれたから今がある」「僕たちも頑張った」と言えるように。一日でも早く「Stay Home」が解消され、子どもたちの笑顔を町中に戻すため、励ましあって行動・実行すること。それが「抑制」を早期に解消に向かわせる手段だと考える。

統括館長：針山直幸

わかば祭

は中止になってしまったけれど・・・

菅生こども文化センター 45歳の誕生日



桜にかこまれる、初代菅生こども文化センター

私は二代目。上は先代の写真。1975年5月17日生れ。どうです？ 当時としてはモダンな建物ではありませんか？ 山小屋風で赤い三角屋根が斬新ですよ。写っている桜は、先代が誕生した時に植えられたもの。今でも春を彩っています。

先代から聞いた話です。先代は、当時、菅生の地に移り住んできた人たちの期待を背負って誕生したそうです。川崎市は、当時、公害に悩まされていて、先代が誕生する少し前、川崎の駅を降りると、何となく臭かったそうです。洗濯を干していると煤塵で黒いしみがついてしまって・・・これでは体に良いわけなく、多くの子どもたちが喘息に悩まされていました。公害地域の子供たちは「グリーンスクール」と言って、山梨県の西湖に、2泊3日で良い空気を吸いに行っていたそうです。

そんな地域では子どもは育てられないと、自然がいっぱい残る「菅生」に移り住んできたとのことですが、自然がいっぱいあっても「文化」がない。まだ宮前区は誕生前で、菅生は高津区でした。映画を見るのも、図書館に行くのも、バスに乗って溝の口に行っていたとのこと。今、バスに乗れば30分弱で行けるけど、当時は路も狭く、へたすると1時間近くもかかったなんて・・・。文化が身近に欲しい

と、約5年間、当時の伊藤市長さんをお願いして、ようやく誕生したのが先代。

そのようなわけで、先代はたくさんの方が集まり、愛されていたそうで、今でも、たくさんの方から、先代との思い出話を聞きます。

愛された先代の誕生日を祝って「わかば祭」が始まり、毎年、多くの人にお祝いされ続けてきていたけど、一回だけ途絶えたときがありました。それは、先代と私の代変わりの年です。愛され続けた先代は木造で、耐用年数30年と言われるのだけど35年間も頑張ってくれていました。でも、寄る年波には勝てず、雨漏りが始まり、周りの板が腐り始めて、2019年3月に役割を終え、工事が始まったため、その年は行われませんでした。

私が誕生しても、優しい菅生のみんなに支えられて、わかば祭も続けてくれることになり、「すごいね、菅生」と思っていたのだけど・・・今回、新型コロナウイルスで中止となってしまった・・・

今、みんなが感染予防に頑張っている。早く皆さんが集えるようになりますように。そうしたら、またみなさんと、いっぱい楽しいことができると、わくわくしています。私も頑張りますので、どうぞ、変わらずに来てください。よろしくお願いします。

現在の、二代目菅生こども文化センター



5月のおしらせ

菅生こども文化センター

☎044-976-0444

蔵敷こども文化センター

☎044-977-2577

【お詫び】

新型コロナウイルスの緊急事態宣言が発令されて、イベントの中止が続いています。解除されて臨時休館の措置がなくなりましたら、また様々に楽しいことを企画したいと思います。

そのため、5月のイベントはいつものように実施いたしません。

しかし、解除されましたら、お知らせはできませんが、こども文化センターに来ていただければ、その日、その日に、何か楽しいことをやっていきたいと思っています。お待ちしております！

一日でも早い解除のために、今少し、みんなで力を合わせて頑張りましょう。

